



**Data**

監督：三城真一  
出演：常盤貴子 / 林遣都 / 中島知子  
/ 岩尾望 / 伊東四朗(特別出演)  
/ 片岡鶴太郎(特別出演)  
/ 吹越満 / 六平直政 / 竹財  
輝之助 / 本上まなみ / 水沢  
奈子 / 萩原聖人 / 西郷輝彦  
/ 豊原功補 / 八千草薫 / 仲  
代達矢

## 👁️👁️ みどころ

伝えられずにいる言葉、ありませんか？ラジオを通じたそんな問いかけに、思わぬ大反響が！それは、メールやインターネットなどの情報化がとことん進んだ現代社会においても、なお人間は伝えられない想いを抱えているため？もっとも、意味シなタイトルとは裏腹に、本作の中身は理想的な作り物の世界。だって、結果的に想いがすべて相手に伝わるのだから。しかし、作り物の映画で一瞬でもそんな幸せを噛みしめることができれば、それで十分？

\* \* \* \* \*

## 今自分と向き合う大切な道具、それがラジオ

私は2009年4月からNHKの中国語会話のラジオ講座を聴講して中国語を勉強しているが、ここ20年ほどはラジオを聴く習慣がほぼ完全になくなっていた。もっとも弁護士の仕事が忙しくなってからも、野球のシーズンではテレビでの阪神タイガースの野球中継が打ち切られた後、ラジオに切り替えて聴いたりしていたが、それは星野タイガースの時代だから6～8年前。しかし、1967年4月から始まった大学時代はテレビとは全く縁がなく、完全なラジオ族だった。さらにそれより前の中学・高校時代の一貫した私の宝物は、第1にラジオ、第2にテープレコーダーだった。ラジオは小学5年生頃から食事中も勉強中もいつも聴いていたし、中学3年生頃に5インチのテープレコーダーを買ってもらった後は、それにラジオから流れる映画音楽を録音していつも聴いていたものだ。それはなぜ？私が中学、高校時代ラジオを手放せなくなっていたのは、家の中には自分を自由に表現できる場がなく、ラジオしか自分が向き合うものがなかったからだ。

テレビが普及すればラジオは過去の遺物として駆逐されてしまうと思われた時期もあった

たようだが、実は全く違う。つまり「ラジオ深夜便」が大人気なことからも明らかのように、ラジオは今でも人間にとって自分と向きあう大切な道具なのだ。

## このキャッチフレーズ、最高！

本作のキャッチフレーズは「伝えたいのに伝えられずにいること、・・・ありませんか？」。そんなキャッチフレーズが浮かびあがったのは、シリーズ累計35万部を突破したエッセイ集で、本作の原案となった『届かなかったラブレター』から。いくら一人一人がケータイを持ち、いくらメールやインターネットが進歩しても、人と人が気持ちを伝え合うには言葉が必要。しかし、面と向かって言葉で伝えるのは、照れがあつたり確執があつたりしてなかなか大変。そこで想いを伝えるのに大切な道具が手紙だ。

文章の上手下手ではなく、手紙の中でいかに自分の想いを伝えるか、それが大切。そしてそのことさえわかれば、手紙を書くのは簡単だ。ところが、いくら手紙を書いてもそれが相手に届かなければ無意味。当然そうなのだが、『届かなかったラブレター』というタイトルのエッセイ集がヒットするということは、そんなミスマッチがたくさんあるということだ。したがって本作のキャッチフレーズ「伝えたいのに伝えられずにいること、・・・ありませんか？」が生まれたのは、そんな「届かなかったラブレター」を一転して相手に伝えようとすることに注目したため。それにちょっと後押しするのが、今やすっかりいい女に成長した常盤貴子演ずるラジオのパーソナリティー久保田真生(まい)。さあ、真生は誰の、どんな「届かなかったラブレター」を、誰に届けるのだろうか？

## それぞれの「届かなかったラブレター」とは？

本作の主演はラジオのパーソナリティーの仕事をしている真生。そして真生にとっての「伝えたいのに伝えられない想い」の相手は、故郷の家を飛び出して上京した後結局わかりあえないまま故郷で死んでしまった父親。他方、本作のストーリー形成の軸になるのは、函館に住む漁師の祖父速見恭三(仲代達矢)、北海道庁で働く父親速見健一(豊原功補)、高校生の息子速見直樹(林遣都)の3世代の男たちだ。

本作の物語を紡ぐ登場人物は多いが、その一人一人のストーリーは紹介できないので、名前だけ紹介しておけば次のとおりだ。

高級ランジェリーショップのオーナーで、今はシングルマザーへの道を歩もうとしている松田由梨(中島知子)とその母松田晶子(八千草薫)

総合病院の院長を勤める中倉謙吾(西郷輝彦)の息子で、ある女性との結婚に悩んでいる医師中倉晃平(竹財輝之助)。彼は真生の番組に「恋する戦士」のペンネームで投稿していたが、彼にとっての「届かなかったラブレター」のお相手は？

九州に妻子を残し、馴れない東京で一人タクシーの運転手をしている稲村太郎(岩尾望)。彼は仕事でいつも真生の番組を聴いていたが、ある日彼宛てに流れてきた「届かなか

ったラブレター」とは？

真生の親友で、由梨が経営する高級ランジェリーショップの店長をしている、恋多き女栗島可奈子（本上まなみ）彼女は真生と真生に心寄せる恋人で商社マンの後藤大介（萩原聖人）との仲を心配しつつ、一瞬なモーションを？

直樹のクラスメイトで、互いの存在を意識している女の黒沢留美（水沢奈子）彼らは笑わないじいちゃんを笑わせる方法を真生の番組に質問し、リスナーから応募があったやり方でいろいろとじいちゃんを笑わせようと努力するが・・・。

## タイトルの登場は後半から

映画は前半かなりスローなテンポで、「届かなかったラブレター」をテーマとしたこれら多くの登場人物の姿が紹介されていく。そして、スタートから約1時間経った頃、ある決断をした真生が社長の龍木雁次郎（伊東四朗）上司の竹下淳（吹越満）らが出席する会議の席である企画の提案をするところから、やっとタイトルの意味が明らかになってくる。

真生がある決断をしたのは、ずっと引き出しの中にしまってあった父親からの手紙を開封し読んだため。そして「ある企画」とは、自分と同じように伝えられずにいた想いをラジオで伝えようとする企画。やはり実体験から得た発想は説得力があるようだ。そんな真生の精一杯のプレゼンテーションをしっかりと受けとめたのが、龍木社長。そして、龍木社長が自ら名付けた番組のタイトルが「引き出しの中のラブレター」だ。さて、全国のリスナーから引き出しの中のラブレターが届くのだろうか？そしてそのラブレターはリスナーたちにどんな感動を喚起するのだろうか？

## 狭義のラブレターVS広義のラブレター

キリスト教のキーワードは愛だが、私見によれば愛には狭義の愛と広義の愛がある。狭義の愛とは男女の恋愛で、その一部は性愛に通じるもの。これに対して広義の愛はまさに神の子イエス・キリストがはりつけにされながら人間たちに伝えた、絶対的で献身的かつ自己犠牲的な愛。それと同じように、ラブレターにも狭義のラブレターと広義のラブレターがある。

狭義のそれは男女間の恋愛に関するものだが、龍木社長が映画の中で明確に解説するように、広義のラブレターとは、たとえば離れて暮らす家族へ、いつもそばにいてくれる友人へ、昔の恩師へ、など言葉やタイミングが見つからないまま言い出せなかったありがとうやごめんなさいなど、心の中の引き出しにしまってある想いを伝えるもの。そんな風に広義のラブレター概念を確立させれば、それを聞いた全国のリスナーたちがそれぞれの心の引き出しからたくさんのラブレターを出してきたのは当然。しかして、本作のストーリー形成上の焦点は、あの頑固じいさん速見恭三が番組宛てに「引き出しの中のラブレター」を出してくるかどうかということに。刻一刻とタイムリミットが迫ってきたが、さて・・・？

## タイトルと中身は正反対！

映画は作り物だから、悲しい結末に導くことも、ハッピーエンドで終わらせることもできる。テレビ全盛時代の今でもラジオの効用は大きいのが、何かと忙しい現代社会において、真生の番組を毎日定時で聴いている人は少ないはず。したがって、いくら「引き出しの中のラブライター」を出し、番組で紹介してもらっても、それが大切な相手に伝わる確率は極めて低いはず。むしろそうだからこそ、「引き出しの中のラブライター」が書いた人にとって大切なものになるわけだ。

ところが本作が描く現実には、そんなタイトルとは正反対。つまり映画前半で紹介された登場人物たちの「引き出しの中のラブライター」の想いはすべて相手に通じていくわけだ。こりゃ、ホントはありえねえ話。したがって、「そんなバカな」「そんな作り話はいりか減にしろ」という批判も成り立つが、考えてみれば映画とは所詮そんなもの。たとえば、セリフをしゃべっている途中で急に歌い踊り始めるミュージカル映画は完全な作り物だが、それでも感動を与えるのはなぜ？映画は所詮作り物。そんな風に割り切ったうえで、登場人物すべての想いがパーフェクトに伝えられる結末とした本作は、作り物に徹したからこそ価値があるのでは？私はそう評価したが、さてあなたは？

## あのじいちゃんが笑った！

東京に住む真生が函館の直樹の実家を訪れることになったのはある反省から。つまり、直樹から「じいちゃんを笑わせたい」という手紙を受けとった真生がリスナーからあの手この手の「じいちゃんの笑わせ方」を募集し、直樹がそのアイデアを一つ一つ実践したところ、かえって祖父と父親の関係を悪化させることになったためだ。もっとも、これも作り物の映画だからこそ成り立つストーリー。つまり現実には、一人のリスナーのためにパーソナリティーがそこまでフォローすることはあり得ないはず？

箸が転んでも笑いたい年頃の女の子ならいざ知らず、あらゆる苦勞を自分の心の中に収めてきた恭三にとって、笑いがかなり縁遠いものになっていたのは当然。私だって、笑いを誘うのが命のパラエティー番組で、一生懸命視聴者を笑わせようとしているお笑い芸人の姿を見ていると、かえって白けてくるばかりでとても笑う気持ちになれないのだから。

しかして、三城真一監督の演出はほとんどんじいちゃんの笑いにこだわっていることがラストになって明らかになる。もちろん、ポイントは芸達者な仲代達矢なればこそそのワンシーンだから、その演技の妙を見逃さないように。あのじいちゃんが笑った！これは他のどんなハプニングをも超えた奇跡？

## いい女に成長した常盤貴子に拍手！

私は『イブは初恋のように』（91年）で女優デビューした常盤貴子を、数多く観てきた。

直近での目立った活躍は、NHK大河ドラマ『天地人』のお船の方役と東宝の三部作『20世紀少年』のユキジ役。しかし、私が最も印象に残っているのは、テレビでは彼女を一躍有名にさせた93年の『悪魔のKISS』であり、映画では『赤い月』（04年）。彼女は1972年生まれだから、今すでに37歳、つまりアラフォーの年代にさしかかっている。女は若いほどいいというもある意味事実だが、10月9日に観た『サイドウエイズ』（09年）が教えてくれるように、極上のワインもいいがピークを過ぎた味わいも捨てがたい？

常盤貴子の持ち味の1つは、去る8月3日に亡くなった大原麗子ほどではないが、あのちょっと舌たらずな独特のしゃべりで、私はそれが大好き。その意味で、本作におけるラジオのパーソナリティーという役柄は彼女にピッタリだ。亡くなった父親との確執に悩む真生、しばらくの間引き出しの中にしまっていた父親からの手紙を読んで泣く真生、伝えられずにいた想いをリスナーに伝えるための番組を、勇気をもって提案する真生、じいちゃんからの手紙がくるのをひたすら待つ真生、番組の終了間際に届いたじいちゃんからの手紙に感動する真生、そんなさまざまな真生の姿を、大原麗子ばりに(?)常盤貴子が熟演。すっかりいい女に成長した常盤貴子に拍手！

2009(平成21)年10月13日記

## 「恋多き女」が選んだお相手は？

天下のプレイボーイ、ダウントウンの松本人志が09年5月17日一般女性と結婚したとのニュースには驚いたが、女優としてデビュー以来多くの浮名を流してきた「恋多き女」常盤貴子が最も交際期間が長かったのがこの松本人志。常盤は結婚を視野に入れて付き合っていたものの、松本の女グセの悪さに嫌気がさして自分から縁を切つたらしいが、さてその真相は？

他方常盤貴子と長塚圭史とのツーショット写真が撮られたのは05年8月だが、03年の『ゲロッパ!』で共演した彼は常盤より3歳年下。早稲田大学卒業後、脚本家・演出家・俳優として活躍

する彼の父親は08年NHK大河ドラマ『篤姫』で篤姫の父親役を演じた長塚京三だから、毛並みの良さは抜群。そのうえ浮気とは無縁の真面目な性格で、デートも主にラーメン屋というから超堅実。華やかな常盤貴子との相性がどうかはわからないが、やはり選ぶなら遊び人ではなく真面目な男が1番ということか？

ちなみに、松本のお相手は結婚発表時既に妊娠中だったが、常盤の妊娠はなし。今後も女優業を続けるらしいから常盤貴子ファンとしてはひと安心。次の主演作に期待したい。

2009(平成21)年11月5日記